

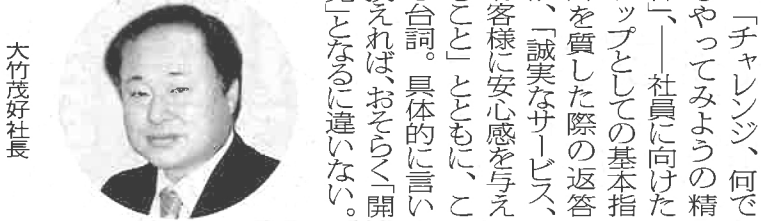
総武機械

業界有数の「元気印」

メーカーまた商社として健脚拡充

「開発」精神の生む多面的展開

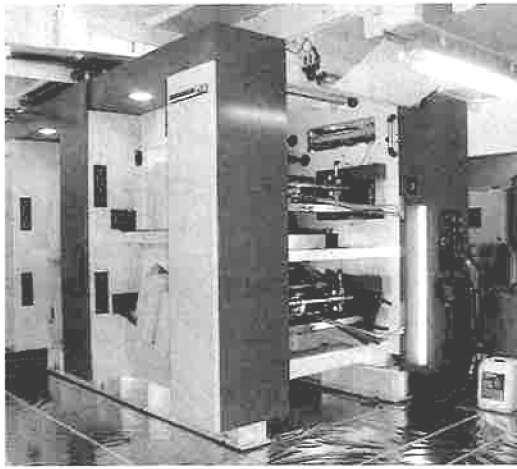
少なくともここ数年に限れば、知名度の向上、販売実績、さらに専門輸入商社としての取り組みとを併せ、展開の勢いで際立つ業界企業の1社が、総武機械(千葉県東金市、☎0475・555・2135)に違いない。言い換えれば、東西から相次ぐ逆風に見舞われ、南北から断続的に課題が押し寄せる業界環境下、この企業こそ、現在では業界有数の「元気印」メーカーとも映る。1980年創業の同社で初の生え抜き社長として、主に機械設計に取り組んできた大竹茂好氏がトップに就任したのは2013年、以来、大竹社長けん引のもと、同社はおそらく「開発」を最大のバネに、独自の事業軌道を描き現在に至る。グラビア印刷機はもちろん、C型フレキシ印刷機から各種「Roll to Roll」機構の特殊機械の開発、あるいは輸入機械の商社事業まで、その多面的で独自の展開は、今後さらに上昇軌道を鮮明にする可能性が膨らんでいる。



大竹茂好社長

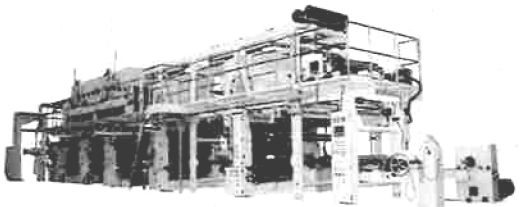
「チャレンジ、何でもやってみようという精神」――社員に向けたトップとしての基本指針を質した際の返答が、「誠実なサービス、お客様に安心感を与えること」とともに、この台詞。具体的に言い換えれば、おそらく「開発」となるに違いない。

実際、有言実行、大いには新生・総武機械竹社長がけん引した約6年間は、「開発」とも重なる新生・総武機械の歩みに通じ、「開発」あるいは「開発」精神の生んだ成果が、グラビア印刷機メーカーとして1位2位メーカーとは距離の遠い同社の存在を急速に浮上させて大きいこと分は紛れもないだろうからだ。(ただし直近では、「今後は標準機にも力を入れていく」方針も打ち出している)事業展開の精神的軸足を「開発」に傾ける。



CI型水性フレキシ印刷機「watergreen」

用ラボを新築し4色のテスト機を稼働、17年にはコロナ処理装置も設置しフィルム基材への水性印刷にも乗り出した等の「実績」も訴求し、国内外の業界関係者を生産的に刺激する。とりわけ17年の展示は、反響も高く、新生・総武機械の存在を業界内で大きく浮上させた。watergreenは、変化する印刷現場の要請に応えるのが基本方針であり、その限りで開発は現在進行形ながら、現時点ですら、低環境負荷、安定的な高品質印刷に対応できる印刷機械としての各種技術は完成している。詳細は割愛するが、例えば使用インキ量の削減を実現する「小型インキ循環装置」小ロット用に必要量の要望に応えたものでラボのテスト改良により三つの課題を克服した。①供給インキ内への泡の侵入・発生抑制②インキ・コシナ内での発泡抑制と泡の消滅性③脈動緩和の持続性。



ないマウントとデマントを1台でカバーできる「プレート・マウンタ(改良版)」等々。同社ではwatergreenを今後は、中国を含めた東南アジア市場での販促も積極化する方針を固めている。

カスタムメイドメーカーとしての実績も見逃せない。需要家企業それぞれの個別要請、個別作業条件に柔軟に対応して開発製造する「Roll to Roll」機構の各種機械だ。これが「チャレンジ精神の遂行」というよりもニッチ需要取り込みの一端で、あえて個別需要に対応できるわが社の蓄積した各種技術の成果(大竹社長)が、既存機の改良・改造・取りまとめなどのカストムメイド需要にも対応し、「改造」だけでなく多くの成果(評価)を得ていることも報じておく。

グレーラミネータ+グラビアコータ

1巻ごとに稼働し製作していたのに対し、需要は効率向上を求め、幅広原反をスリットし一度に6連で巻き取る装置の開発を要請する。これに、設計図を作製、打ち合わせを重ね、合意に達し、製作したのがこの「巻取機」。幅広原反をスリットし、半折にし、タレットで巻取る仕組み。スリット・半折・巻取りを全自動で制御している。最高速度は毎分1500。大づかみに言えば、作業効率の6分の1にまでの改善を実現したわけだ。

各種軟包装用を始め、チューブ用、建築用などをそろえるが、際立つのは紙グラ印刷機への高い支持。総合印刷系大手が新たな製造拠点で同社の紙グラを導入した事実、業界における高い評価を例証する実績に違いない。軟包装基材として「紙」への関心が高まるここ数年の情勢は、同社にとり、有力な追い風となる期待も寄せられる。

「海外」としての展開

「日本のメーカーであり、機械メーカーの立場からわが国軟包装業界の成長発展に少しでも寄与したい思いは強い」として、同社は、今後の展開に際しては、メンテナン

「スリッター6連半折巻取機」も同社ならではの開発機。薬剤分は、開発の契機は、大手薬品メーカーからの要請だった。従来、薬を入れる袋の前工程で、小巻にする装置が

印刷機・他で販売実績を上げていくのだ。

高い技術水準、価格競争力を前提に、納品後のフォローを総武機械が担う「安心感」が国内販売上の有力な決め手になったことは疑えない。

直近の同社の状況は、当然と云うべきか、新型コロナウイルス対策が重い課題。「新型コロナウイルス対策本部」を設け、全社員に向け対策の周知徹底を図る一方、コロナ余波の一環で着実に膨らみ続ける食品系企業からの要請への対応に四苦八苦する情勢だ。